五十一　変動する時代と人間を描いた文学　――『夜明け前』

人間は、時代とともに変化していく歴史的な社会にあって、世代を継承する家族を構成し、食を求め衣と住も得ながら生きる動物だが、とりわけ人間に特別なのは、高度な精神の働かせ方ができて、自己を意識しつつどのように行動するかを思考し選択することである。人間は、単に動物的に生きるのではなく、精神世界と呼べるものを伴いながら生きるのである。文筆家がその文章にある人物や群像を登場させて、性格や情動など人間の精神面からその言動までを表現しようとすれば、登場人物たちの生活条件から社会の状況まで多かれ少なかれ記述することになる。人間にかかわるあらゆることをさまざまに表現する多様な文学が生まれるのは必然である。

＊

最近、現代中国の小説『老生』を読む機会があり、それについての感想の一端を「蝶の雑記帳四十八」に記した。『老生』は、それ以前の混乱に触れず一九三〇年代からしか語らないのだが、それでもおよそ七十年間に四度も大きな変動を経験した中国に題材をとっ

た小説である。それを読んでわたしの関心は、文学作品は大きく動いた歴史とどのように連関しているかという問いに向かった。とくに、欧米に比較して近代的な社会制度が整っていず経済的にも遅れていた国々で、第二次大戦後の混乱が小説にどのような差を生み出したかという問いだった。しかし、文学を批評する力のないわたしには、作品の文学的特徴を論じることは手に余ることで、わずかに知っている『百年の孤独』や『真夜中の子供たち』を挙げて、それらの小説の歴史的背景を思い浮かべることしかできなかった。

それでも、『老生』を『百年の孤独』・『真夜中の子供たち』と並べ、そこへ比較のためにバルガス=リョサの『緑の家』を置くと、これらの作品の相対的な距離がわたしにも見えてくる。同じ南米の作品である『百年の孤独』と『緑の家』はなにかしら近い。〝新大陸〟へ植民したイスパニア人たちが四百年かけて築いた社会は、中国やインドのように何度も大きな変化をこうむった古い社会とはちがうのだ。社会に堆積した文化の差異を過大に評価してはいけないと思うが、文化の差異がしみこんでいる作家が、異なる背景をつくる社会と文化の中に人間を置いて描けば、異なる小説が生まれるのは当然なのである。こう考えれば、同じ東洋でも異なる文化圏を形作るインドと中国の作品、『真夜中の子供たち』と『老生』とが、ちがったスタイルの小説になるのもまた当然ということになる。

しかし、だれもが考えることのできることをこう大雑把に言ってみても、これらの文学

作品を十全に味わったことにはならない。わたしの中には、漠然とした未熟な感想が表現できずにあるだけということだ。

そうだけれども、外国ではなく日本の近代化と敗戦・復興という二度の大きな変動期を、小説がどのように描いたかというわたしの関心は依然として残る。「蝶の雑記帳四十八」では、歴史的背景が意識にのぼる『老生』などの作品と対照できるものとして、二つ三つ読んだ大江健三郎の作品を思い浮かべたのであった。考え直してみると、大正期から敗戦・戦後までの比較的長い時代が題材の作品として、北杜夫の『楡家の人々』があった。だが、その記憶も薄れてしまって、わたしの思索を助けてくれなかった。いくらか読んだほかの戦後小説は短期的な時期を対象にしたものが多かったように思う。敗戦・復興の時代と小説のかかわりについては、これらの作品群を合わせて考察するのがよいのだろう。しかしここで、この問いを果たすことはできない。

もう一つ、現代の日本人が思索を巡らすべき時代は、第一次の近代化をなんとか果たした幕末・維新の変動期だと思う。そして、その時代に生きた人間を書こうとした小説で先頭に挙げるべきなのが島崎藤村の『夜明け前』だということは知っていた。ところが、なさけないことにそれを読んではいなかった。わたしの問いを少しでも明らかにするには、

それを読まなければならない。というわけで、今回、書きとめるのは『夜明け前』を読んで考えたことが中心になる。

＊

文学を批評する力がないのに小説のことを考えようというのだ。手がかりになるものが必要である。そこで、当代屈指の読み手である松岡正剛の「千夜千冊」を検索して、『夜明け前』の批評を読んだ。そこには、『夜明け前』の評価が「『百年の孤独』などに匹敵するものでもあるはずなのだ」という言葉で表現してあり、「歴史の本質に挑んだ文学」というとらえ方が中心に据えてある。

それをたどってみよう。松岡は、――藤村は、日本人のすべてに「或るおおもと」を問うたのである。その「或るおおもと」がはたして日本が必要とした「歴史の本質」だったのかどうか、そこを描いたのだ。それを一言でいえば、いったい「王政復古」とは何なのかということだ――と論じ始める。そして、摘録すれば、――王政復古は変転し維新ののちに歪んで、ただの西欧主義になった。何が歪んだのか、日本の挫折の歴史を凝視し、父の挫折、王政復古を夢みた群像の挫折、さらには藤村自身の魂の挫折を塗りこめた。この

ことを藤村ほど真剣にかつ深刻にかつ自分の血を通して考えた作家は稀有である。日本の近代に「過誤」があったのではないかと問うて、…青山半蔵の挫折が答えであった。――などの言葉をつづって論述し、おしまいに、――この作品は日本の近代文学史上の唯一の実験を果たした作品だったのである。われわれは半蔵の挫折を通して、日本の意味を知る。もう一度くりかえてしておくが、その〝実験〟とは、いまなお日本人が避けつづけている明治維新の意味を問うというものだった――という結論的な言葉で結んでいる。

松岡正剛は、「『夜明け前』は明治維新の意味を問うた」と言う。しかし、そこまでの論述は言葉に的確さが欠け必ずしも論理的につながらない、と感じた。わたしの不満は、幕末・維新の変動の歴史が「ただの西欧主義に歪んでしまった王政復古」だったかのような狭い論じ方にある。作家は、小説の中に自己の思想をにじませ、場合によっては登場人物に語らせる。しかし、記述の内容がそのまま作家の思想ではない（作家島崎藤村の人生と思想を理解することはもう一つの課題である）。藤村の思想の変化を述べる松岡の見方のように、藤村に揺らぎのない思想が確立していなかったとしても、藤村を、西洋思想も採り入れた明治初期の教育を受けて、優れた教養を身につけた人と考えるべきだろう。そうでなければ、『破戒』ほどの近代的な小説を人に先駆けて書けなかったはずだ。『夜明

け前』の主人公のモデルは藤村の父だが、考え方の古かった時代が対象である。作者の思想をそのまま昔の人の言動にかぶせて書いては、小説は成功しなかっただろう。

たしかに藤村は、父の人生に肉薄しようとして、父の傾倒した平田国学を軸に『夜明け前』を書いた。父の考えはこうだったろうかと想像し、その破局に終わった人生を痛切に身に引き受けながら書いた。平田国学に沿う主人公の考えは、古代の巧まない人の在り方と、古代にあったと想定された純朴な王政（共同体）を尊重するものである。主人公のその思想が彼の人生をどのように左右したかを描く物語で、「純朴な王政への復古」の希求が浮き出て、それからの逸脱を批判する主人公の思いの高まりがドラマを導くことになる。しかし、物語のこの主旋律から、藤村がこういう側面においてだけ明治維新の意味を問うた、と単純化することにわたしは疑問を抱く。

とはいえ、松岡正剛の批評には参考にすべきことが書かれている。この批評を参照基準にすれば、なにごとかが言えるかもしれない。

＊

わたしは、島崎藤村はもっと広い観点から幕末・維新の変動の歴史をとらえようとした、

と考える。その歴史記述は、ただ、平田国学的な観点から世の動きを観るにとどまらず、また、小説の域をも超えていく。政治・社会の動きから、経済の情況、文化や生活や習俗の変化まで、ほとんど幕末・維新の変動全体に及ぼうとする。

そのような『夜明け前』の徹底した歴史の記述は、『堺事件』などの「歴史の部分」を素材とした森鴎外の作品とは（松岡説と異なる意味合いで）ちがうのではないか、という考えをわたしに起こさせる。今回の思索の冒頭の文章はそういう見方への伏線として置いたのである。島崎藤村は、一人の人間の一生を、その生活と行動を条件づけた同時代の社会と人の動き全体と仔細に関連づけて考え、描こうとしたのではないか。すなわち、藤村は、一方に個人の人生を置き、他方にその個人を動かす歴史を置いて、二つを縦横に織りなして人間という存在の総体を構成してみようとしたのではないか。主人公のモデルである父の全生涯を生き直そうとする強い熱意が、七年かけて出来上がった作品をそのようなものにした、とわたしには見える。こう考えれば、『夜明け前』は、世界文学史上でもほとんど類例のない小説であり、貴重な力作だと言える。

この見方では、『夜明け前』は狭い意味の小説の枠を超えた文学である。この文学は、小説として人生を描くことと、その人生が置かれていた歴史を記述することとを、二つながら主題として書いている。だから、その記述は、歴史自体の解明に迫るほどのもので、

多くの読者を得ている歴史物はもちろん、森鴎外の歴史小説とも一線を画するものだ、とわたしは思う。

一九二九年に『夜明け前』を連載し始めたとき、藤村の前には、近代西洋思想の洗礼を受けた作家の歴史小説のお手本として、一九一〇年代に書かれた森鴎外の作品があった。五十六歳までそれを眺めていた藤村は、鴎外が史料を収集整理して考察しながら書いた方法を学んで、それを発展させたのである。藤村は、世の中を見る目の修練を積んでいた。政治・社会などの大きな歴史の推移をかなり的確に把握しただけでなく、社会の現場の動きを明らかにし、交通の歴史的な実態を知らしめ、街道筋の人々や農民から江戸の庶民まで人々の経済的状態の記述も漏らすことがない。さらに、平田国学に注目することで思想の成り行きを考察し、文化・生活の変化など、数え上げたらきりがないほど広く歴史を見渡して記述している。この視野の広がりは、父のことを知るために馬籠宿に残っていた文書類を研究することによって促進されたのだろう。『夜明け前』の歴史記述は父の物語が要求するのである。藤村の関心は、歴史の教科書でもほとんど明示的には書かれていないことにまで及ぶ。たとえば、神奈川開港の状況や、その影響が木曾山中まで達して物価が上がったことなどを臨場的に描写して、西洋資本の運動が日本の社会を変えていったことを示す。さらに、木曽や江戸の景観の変化から、照明器具の進化、髪型の変化、お歯黒が

すたれたことなどまで、日常生活に密着したことがらの描写も尽きない。この大小の事物に広く目配りした記述は、歴史家の記述法ではないが、幕末・維新の変動期を概説する立派な歴史の記述になっている。だから、『夜明け前』は単なる小説ではない。

＊

『夜明け前』の価値を見極めるためには、もちろん、他方の小説の面を鑑賞しなければならない。その前に、主人公の思想や行動に影響を与えた「歴史」は、達意の文章で適切に物語の中に織り込まれていることをもう一度言っておこう。歴史記述は徹底していて、うかつなブロガーが、文庫本の第一部上巻だけを読んで、この小説にはストーリーがないと見誤るほどだが、その大部分は、人と情報の行き交う宿駅馬籠という定点で、主人公が見聞きできたという表現にして、小説の結構は崩れていないのである。織り込まれた「歴史」は、一人の人間の日々の生活に影響を与えて人生を形成する環境である。そうして形成された人生の物語を小説は語る。『夜明け前』は、歴史の本質に挑んだと言うよりも、人間という存在の条件とありようを尋ねたと言う方がふさわしいだろう。

ヨーロッパの近代文学から学んだ日本の近代小説にはさまざまな潮流があったが、島崎

藤村は、その中で自然主義の作家とされているようだ。その流れは日本に特有の私小説を生んだ。藤村も処女作『破戒』のあとはそういう作品を書いたけれど、読書量の少ないわたしは読んでいない。反自然主義の夏目漱石や森鴎外もいなくなり、プロレタリア文学が現われたあと、日本文学の潮流は変化の潮時にあったように見える。そういう時期に藤村は、自己の行為によって深刻な危機に陥った。その危機を克服するのに作家として歩むほかに道は見つからない。模索の中、老齢にさしかかった藤村にはもう一度新しく文体を形成する力は湧かなかったのだろう。そこで、鴎外流の歴史小説に活路を求めたのだと考えられる。選ばれたテーマは父の生涯を理解することで、その仕事は自身を再生させるためにもおそらく必死の作業だった。それが、（父の考えをたどるのに必要と考えられた）歴史の状況を丸ごと含めて、人生の総体を描くというそれまでほとんど誰も試みなかった文学へ向かわせたと思われる。『夜明け前』には以前の文体が残っているのだろうが、鴎外作『渋江抽斎』の品格に倣うように、「歴史」の部分と同じく物語は抑え気味に淡々と書かれた。

しかし、その語りに不足があるわけではない。『夜明け前』の藤村は経験を積んだ熟練した小説家だった。全体の構想はしっかりと組み立てられ、どの場面の描写も行き届いている。同じく作家の大佛次郎が、歴史上の出来事の馬籠宿での実況が生き生きと写されて

いるとして、藤村の文章を引用しているほどだ。そして、情景を語る文章のどこにも、若いころ詩集『若菜集』や『千曲川のスケッチ』を編んだ詩人の抒情が現われる。「歴史」の叙述を融合してずいぶん長い物語の展開も工夫されている。語り口は静かで同時代の『魔の山』ほど感興を盛り上げないけれども、話題は適切に切り換えられて読者は事態の進行をたどることになる。藤村の父の尋常には終わらなかった生涯は、もともと小説の条件を具えていた。熟練した作家の技量がそれを成功した小説にしないはずはなかったのである。歴史の叙述が中心のところでも語りは巧みだ。内外騒乱の危機にあった一八六五年、英仏米蘭の軍艦が大阪湾に迫った際かろうじて対外交渉を切り抜けた状況は、その大任を果たした外国奉行山口駿河の物語として語られる。最後の一節が、身の危険を逃れて木曽街道へ下り馬籠本陣に宿泊した駿河のようすを、窺いに行った主人公半蔵が「部屋の内に、激しくすすり泣く客人を見つけた」と描いて閉じられたとき、一瞬わたしの体に電流が走った。そのような珠玉の短編がおそらくいくつもこの長編には埋めこまれている。物語全編の読後感はずっしりと重い。

同時代の二十世紀前半のヨーロッパには、この世紀最高の小説とされる『失われた時を求めて』・『ユリシーズ』・『審判』があった。それらは、それまでなかった文体や斬新な感覚や人間内面の型破りな表現を創始して、小説を革新した。遅れて近代化された日本

では、それほど新しい小説は生み出せなかったと認めざるをえない。しかし『夜明け前』は、一人の人間の生涯をその生活と行動を条件づけた社会と人の動き全体と関連づけて描いた文学作品として屹立し、十分な重量を感じさせるほど人間を描いた小説(の一つ)としてある。世界文学を見渡す人が無視することのできない力作だ、とわたしは思う。それが十指のうちに入るとは言うまい。けれども、S・モームが十冊に入れた十九世紀の『高慢と偏見』と比較して、読後の感動は『夜明け前』が勝る。『ゴリオ爺さん』とでも対抗して立つことができる。そのモームが一人の画家をモデルにして書いた『月と六ペンス』とくらべても、人生を十全に書ききったという点で『夜明け前』に軍配を挙げたい。わたしの思索は、二十世紀中葉の変動の時代を観た作家の書いた作品、『百年の孤独』、『真夜中の子供たち』、『老生』を比較したことから始まったが、『夜明け前』が変動の時代と人間を描ききって独立峰をなしてそびえていることを知る。

読後の興奮が残ったままに文章をつづったので、たいそうな賛辞になってしまった。冷静な人がこの作品をどう見るのかを聞かなければならない。もちろん、作品の欠点を見つけることはできるだろう。一人の人生を描くのにもっぱら主人公の心の動きを追い、ほかの人物は良い面だけに触れて人間の葛藤が明示的に描かれないので、不満をもつ読者があ

るだろう。わたしは、欧米の小説・文学とくらべると、藤村の作品に明るさが足りないと感じる。総じて日本の文学が力強さや乾いた闊達さの点で弱点をもつからだが、この国の文化に深く根ざしている性向から来るのだろう。

ともかくわたしは、いくらか新しい視点を提出して『夜明け前』の評価を正す試みをしたつもりでいる。その結果、『夜明け前』は読むべき優れた文学だという結論に達した。戦争への迷路に入り込む時期に書かれたこの作品は、敗戦・復興の激動に覆い隠されて、今では、藤村の思想は古くその作品も古いと思われているのだろう。しかし、少なくともこの作品はそうではない。人の人生を全面的に描いた類例のない小説として、また、変動の時代に正面からとりくんだ貴重な歴史文学として、長い年月に耐えぬく力をもつだろう。いまだに対象化できていない敗戦・戦後の苦難は、幕藩体制の崩壊・維新の変動を舐めた社会に起きたのである。二度の変動の動因を引きずるその社会の体制が三度目の機能不全に陥った今、日本人の行動様式を知るために『夜明け前』を読むことが必要になっている。

＊

最後に、『夜明け前』という作品の位置を測るのに役立つと思うので、「歴史」の面に

ついてもう一言つけくわえたい。『夜明け前』と同じく幕末・維新の変動期を描くのに、個人の人生を描く小説の側面を捨象して、「歴史」の記述をさらに発展させた歴史文学があるということだ。大佛次郎の『天皇の世紀』がそれである。この長大な書物は、歴史に登場した人々の行動と出来事を詳細に叙述して立派な文学作品である。『天皇の世紀』は、読む者に、日本が近代化しようとしたとき歴史がどのように動いたか、その変動する時代に人々はどのように考え行動したかを反省させ、日本に生きる者がこれからどのように行動するだろうかを考えさせる力をもつ。

大佛次郎は、父に、この著作を『太平記』に相当するものだと語ったそうだ。そう、わたしも、『天皇の世紀』が日本文学の古典である『太平記』に匹敵するものだと思う。南北朝の動乱を「太平」という皮肉な書名でよび、その変転極まりない人間たちのうごめきを突き放して描いた著者はすごい人物だが、それに対して、未完の書物を『天皇の世紀』と名づけた大佛の意図はどこにあったのだろうか。ともかく、フランスの歴史を題材にノンフィクション作品を書いた経験をもつ作家は、もう半世紀も前になるけれど、史料も十分に手に入る自国の歴史を、現代的に客観的にしかも文学の香りを籠めて叙述した。大佛次郎の歴史の書き方は、トゥキュディデスの『歴史』に似ているように思う。比較すれば、大佛は、島崎よりも、ドキュメンタリーに近い歴史文学をつくったのである。

＊

長くなるといけないのでこの辺で切り上げよう。初稿ができたあとに、M・ブロックの「歴史の固有の対象をなす人間(たち)の諸活動の光景」という言葉に出会い、わたしの考えたことが的外れでないことを知って意を強くした。この言葉をよく体現しているという意味で、『天皇の世紀』は、『平家物語』と『太平記』に連なることのできる歴史文学だ、とわたしは考える。そして『夜明け前』は、そういう歴史文学の特質をもち、小説の方法で、ブロックの言う「当事者であった人間とその環境をなす文明との運命の曲線」を描くことに挑戦して成功したのだ、と考える。

また繰り返しになるが、島崎藤村は、日本が敗戦への道を歩み始めたころに、幕末・維新の変動期の人物と歴史を考え、大佛次郎は、敗戦を見たあとに、同じ時代の人々と歴史を考えた。日本人は、近代化のための苦闘を経験したあとに、もう一度敗戦と復興の苦労をしなければならなかったのである。二人の作家が自分の同時代を見つめながら前の時代を考えたように、わたしは、ほんとうは、この二度目の変動についてももっと知りたい。それが十分できない一因は、それを考えさせてくれる『天皇の世紀』や『夜明け前』ほど

の著作がないことにあるだろう。それでも、近い時代の歴史は今の時代をつくりその推移の底流をなしているのだから、「過誤」や「挫折」も含めて、それを精確にとらえる努力をしなければならない。その歴史と人間の動きを学んでおくことは、もう足音の聞こえる三度目の変動の時代を迎えたとき、うろたえず行動するために必要だと思う。

だからわたしは、現代日本に暮らす孫の世代に、どちらも長編だけれど、『天皇の世紀』をぜひ読み、『夜明け前』もまた読んでほしいと願う。

付言

松岡正剛は、二十世紀最後の年末に『夜明け前』の批評を書き、その文末で、不満をかかえて二十世紀が終わることに、とくに日本の二十世紀が議論されずに済まされることに強い苛立ちを表明し、われわれは「夜明け前」にいるのではないかと問うている。

二〇一六年十二月末、初稿。二〇一七年二月、修正稿。